古代エジプト楽器、シストルムの総合的研究
― 永遠に生きるシストルム ―

倉　阪　英　恵

シストルムは、楽器分類法において体鳴楽器の棒繋式ラットルに属する。古代エジプトでは、主に儀式用の楽器として古くから用いられ、王朝時代を通して変遷しながらも絶えず続いた。現在でもエチオピアのギリシア正教会で用いられている。他の楽器と比べてこんなに長く続いたのは、シストルムのみである。そこで、総合的（考古学・美術学・言語学）にシストルムの変遷や地域性を分析し王や女性神官との関係、用い方で長く存在した理由を明らかにするのが目的である。しかし、研究するにあたり問題が生じる。遺物が発見された際、コレクションとして持ち去られたためどこから出土したのかわからないのがほとんどである。今後の発掘で出土地や出土状況が詳細となり、考古学的な視点での研究がより明確になることを期待する。

シストルムsistrum語源は、ギリシア語のセイストロンseistron（振ること）に由来する。しかし、エジプト語では、セシェシェトseshesht と言い、後にイブibuやセケムsekemuと呼ばれた。本来、ハトホル女神の祭祀でパピルスの花束を揺り動かす風習があり、この音が擬音語でセシェシェトと言われた。原型は、ハトホル女神への捧げものとして使われたのである。神話の関係からパピルスのさらさらした音がとても重要で、シストルムを振ることでハトホル女神を呼び起こす機能があった。今では、セシェシェトもシストルムと一括され呼ばれているが意味合いが違うので同名は不適切だと考える。その背景には、シストルムの用い方が深く関わってくる。このことについて、後に詳しく述べたい。

形態は、ナオス（祠）形とアーチ形の2種類ある。ナオス形シストルムは、取っ手の上にハトホル女神の頭が双方あり、その上にナオスが付いている。ナオスの部分に横棒が2・3本ありそこに金属片などが付いて左右に振ると音が生じる。ナオスの両側には、渦巻き装飾が施され彫ってあったり、後から取り付けてあったりする。これは、雌牛の耳を持つハトホルの角を表現したものである。アーチ形シストルムも同じく取っ手の上にハトホル女神の頭が双方あり、その上にアーチが付いている。アーチの中には、3・4本の棒がはり渡され、そこに丸や四角の小さな金属片が付いた。また、取っ手の上が立方体であったり直接、アーチが付けられたりもした。

上記でも述べたが、シストルムの遺物は諸外国の収集家に渡り、そのため資料を集めるのがとても困難であった。私の知る限りでは、エジプトの遺物を所蔵している博物館・美術館は全て調べた。合計238点である。この資料を用いて変遷や地域性を見ていく。

ナオス形シストルムの変遷で特徴的なのは、末期王朝時代（第26王朝）の遺物で取っ手に王名が刻まれていた。又、ナオスの頂上には、王と深く関係しているハヤブサやホルスがいたことで、この時期からハトホル女神というよりは、王の象徴へと変化していった。一方、アーチ形シストルムは、首飾りが付けられたりギザギザの髪型や猫がいることからバステト女神やイシス女神へと変わられた。地域性を見てみると上エジプトは、アーチ形が多くアーチの中央に猫の姿が見られた。素材は、ファイアンスやブロンズ以外に木製がほとんどであった。下エジプトは、ナオス形が多くナオスの中央に王と関係があるウラエウスの姿が見られた。素材は、ファイアンスがほとんどで一時的にブロンズが取り入れられた。そのブロンズ製は、アーチ形でギザギザの髪型や猫がいた。そして、取っ手は節々になっていたり羽毛模様になっていたりした。ローマとその周辺の国々は、何の飾りもないアーチ形のブロンズ製であった。

遺物の変遷と地地性をまとめるとナオス形シストルムは、王と深く関わ

る伝統的な形態で年代変遷があった。一方、アーチ形シストルムは、各地域の信仰女神により独自性が見られた。

シストルムが描かれた壁画を通して年代変遷を考察すると、ナオス形シストルムは横棒がなく必ず右手で持たれることが分かった。ハトホル女神や女性神官が持っていたが、プトレマイオス朝やローマ時代になると王や王妃に変わる。新王国時代（第19王朝）は例外でナオスの中央にウラエウスを強調して描いたシストルムを王が持っていた。アーチ形シストルムは、新王国時代から横棒にシンバルが通されている。主に女性神官が持っていた。地域性は、やはりハトホル女神を信仰している上エジプトに多く描かれた。特にナオス形シストルムがほとんどであるが一時期、新王国時代（第18．19王朝）貴族の墓にアーチ形シストルムを持つ貴族女性や女性神官が描かれた。下エジプトにおいては、あまりシストルムが描かれなかった。

その結果、ナオス形シストルムは、ハトホル女神信仰の儀式道具から取って変わり王との結びつきが色濃くなっていく。王家の血筋でなくなる新王国時代（第19王朝）の王から目立ってきた。アーチ形シストルムは、楽器としての機能があり女性神官に好まれ用いられた。

シストルムの遺物や壁画に刻まれたヒエログリフを解読すると、中王国時代（第12王朝）、新王国時代（第18・19王朝）、第三中間期（第22王朝）の遺物には王名（王妃）、あるいは王名と女神名が刻まれている。しかし、末期王朝時代（第26・27・30王朝）は王名以外にシストルムを振る・歓喜すると刻まれ、女神名もハトホル女神以外にバステト女神や他の女神に嘆願しているのが目立つ。壁画も同様、中王国時代や新王国時代はハトホル女神に関係する場面であったのに末期王朝時代からバステト女神やイシス女神が登場する「遠方の女神」、「洪水」に関する神話の場面に変わっていった。

これらのことを踏まえて王とシストルムの関係を見ると、以下のことが言える。王がシストルムを積極的に遺物や壁画に取り入れた際、社会的な

背景が見え影響していることがわかる。シストルムは初め、ハトホル女神の女性神官にはなくてはならない儀式道具であった。そして、それは神を呼び起こすことができる唯一の媒体物であった。そこに目をつけた王は、シストルムを持つことで神を支配しようと考えた。特に、新王国時代（第19王朝）の壁画に多く見られる。この時代から王は、王家の血筋ではない者がなり神をも支配できる、すなわち神と一体化になれることから正統化させようとした。そのため、民衆にわかりやすく神殿の壁画に王がシストルムを持つ姿が表わされている。末期王朝時代（第26王朝）になると壁画に変わって遺物が多くなる。この時代、復古主義政策が取られた。これは、王がエジプト人ではなくアッシリア人やペルシア人になり民衆が不安がるとのことで古王国時代の宗教や文学を再び甦らせようとした。しかし、王にとってシストルムは儀式道具ではなく民衆を支配する道具であったと考える。また、この時代から壁画にヒエログリフで権力などを意味するセケムが現われる。シストルムも同じ表記で呼ばれることがあった。そして遺物は取っ手にほとんど王名が刻まれていた。

王と関係するシストルムは、壁画も遺物もナオス形シストルムである。そして、王名が刻まれた遺物の素材は、ファイアンス製のみであった。なぜならファイアンスは貴重で神聖な青色だったからである。結局、ナオス形シストルムは時代を通して段々、王の象徴物へと変化していった。

シストルムの用い方を説明するとナオス形シストルムは、ハトホル女神から王へと変わり象徴物となっていったことが上記からわかる。アーチ形シストルムは、初めナオス形シストルムと同様、ハトホル女神の女性神官が主に持っていた。しかし、末期王朝時代から「遠方の女神」、「洪水」の神話が鮮明になり他の女神を信仰する女性神官の中でシストルムが独自の形態を持ち取り入れられる。アーチ形はナオス形と違い伝統的な形態をしておらずシンプルな形をしていたからである。ローマや他の周辺諸国にも取り入れられ広範囲に広がっていった。

上記で述べたが、シストルムと一括して呼んでいいのかという問題である。アーチ形シストルム、特にローマや他の周辺諸国のシストルムは「振ること」という意味のギリシア語である。形態はエジプトのものと異なる。ナオス形シストルムはエジプト独自の形態をし王に関係しているので意味あいが違ってくる。それゆえ、エジプトのものとローマやギリシア時代のものを分けて呼ぶ必要がある。

結果、永遠に生きるシストルムはアーチ形で、一方、古代エジプトの王朝時代を反映しているナオス形は、王の象徴的なものだったから他の国へ一切広めず時代とともに幕を閉じた。アーチ形は、王に関与されず独自のものを自由に作れたので変化に富んだ。おそらくローマ人も古代エジプトの伝統を象徴したナオス形はためらい嫌ったと思われるが、アーチ形は、何にでも変化するので受け入れられたのであろう。そこで、エジプトに関連する余分な飾りを取り外し、ただ「振ること」に専念するシンプルな形態にしてローマ独自のものを作りエジプトのものと少し異なるシストルムが広まった。現在もなおアーチ形ではないが、シストルムは多様に形を変え消えることなく生き続けている。